

小学校外国語活動におけるプロソディ指導

—音響音声分析を元にした楽器の活用—

岡本真砂夫（姫路市立八幡小学校）

キーワード： プロソディ 楽器 音声分析

1. 研究の目的

打楽器を用いると、日本語のモーラ拍リズムと英語の強勢拍リズムの違いを意識させやすい。また、アゴゴドラムのような楽器では高低の音を使い分けることができるため、ピッチの違いも表現することができる。しかし、単語ではなく文で指導をする際、リズムの取り方や高低の使い分けが難しいと感じた。そこで、音響音声学の知見を用いて英語母語話者やデジタル教材の音声进行分析し、小学校外国語活動において楽器を利用したプロソディ指導の可能性を探った。また、児童の音声进行分析し、プロソディ指導の課題を検討した。

2. 研究の方法

ALT、HRT、*Let's try! We can!*のデジタル教材、児童の音声を録音し、音声分析ソフト Praat 上で動作するプログラムである **Prosogram** を用いて文レベルのプロソディを観察した。その上で、ピッチの高低、リズムの取り方を検討した。また、外国語活動で扱われる英文から、フットと音節、どちらでリズムを取るのがよいか検討した。

3. 結果

リズムを取るタイミングはフットではなく、音節ごとが適しているといえる。**Prosogram** の分析結果から、ピッチの高低に合わせて打楽器を活用する基準を設定できる可能性が高まった。また児童の音声分析から、開質問でも文末のピッチが上昇する傾向があるという課題が明らかになった。

4. 結論

小学校外国語活動においてアゴゴドラムやカホン等、音の高低を使い分けられる楽器をプロソディ指導に活用できる可能性が高い。ただし、文末のピッチ変化は打楽器では表現できないため、別途指導が必要だといえる。

参考文献

- 川越いつえ (2018). 「音声学・音韻論と英語教育実践 —対話能力を強化する英語音声指導に向けて—」 有働真理子・谷明信 (編) 『英語音声教育実践と音声学・音韻論：効果的で豊かな発音の学びを目指して』 (pp.38-93) ジアース教育新社.
- 大和知史 (2016). 『英語のプロソディ指導における3つの原則』の提案とその理論的基盤」柳瀬陽介・西原貴之 (編) 『言葉で広がる知性と感性の世界—英語・英語教育の新天地を探る—』 (pp.219-231) 溪水社.